

# 続・ 珈琲の思い出 24

鈴木 優子

「今日はね、とりあえずこの【若草コース】というのを注文していますが、優子さんは何か苦手なものとかありませんか？」

「ありがとうございます。大丈夫です！私、食いしん坊なので、何でも食べられます！」

そう言つて恥ずかしそうに笑う優子を見ると、和樹はもう、いてもたつてもいられなくなつて思わず抱きしめたい衝動にかられそうになつた。

運ばれてきた生ビールを掲げて乾杯をする。

「じゃ、乾杯！」

「かんぱーい！」

「ああ、美味しい！今日はね、私、絶対に和樹さんとお食事したかったから、もう必死で仕事を片づけてきたんですよ。」

「僕も同じですよ。お会いできて本当に良かったです。」

その時、優子はふと、和樹と自分の距離が20センチしか離れていないことに気がつき、体中が熱くなつてきた。

「ねえ、優子さんはお酒はお強いんですか？」

「私ですか？強くはないけど、好きな方ですね！」

「ああ、それなら良かった。今日はね、僕にごちそうさせて下さいね。」

「えっ！？ありがとうございます！でも、私は今日は子供たちを母のところに預けているからあんまり遅くはなれないんです。」

「じゃあ、ほどほどに楽しみましょう。」

「はい！」(続く)